日本工業大学通信

大学院の設置が認可される

機械工学専攻・電気工学専攻・建築学専攻でスタート

かねてからの念願であった大学院の設置が、三月十七日付で文部省から認可された。機械工学専攻、電気工学専攻、建築学専攻の三専攻からなる修士課程で、入学定員は各専攻とも八名。募集対象は、大学の既卒者および卒業見込者をはじめ、高等学校などにおいて工業教育に従事している現職教員にも積極的に向けられているところが、特色。四月十四日に筆記試験、翌十五日に面接試験が本学で行われ、十六日には合否が判明する予定である。

大学院設置にいたる背景

本学は設立以来、工業技術に関する体験学習を基盤にした工業教育に基本理念をおき、教員には産業界からも広く人材を求める一方、カリキュラムにおいても再三再四にわたる検討と改善を目指して努力を積み重ねてきた。十有余年の歴史の中で研究に対する姿勢は近年特筆して恥じないまでに成長し、学内施設設備の充実ぶりは、一年前の卒業生が目を見張るようにまで至っている。当然これらの条件の下で行われる教員の研究内容においても着々と成果があがってきており、他大学、諸研究機関、地方自治体や産業界との共同研究、委託研究などが活発に行われている。たとえば、大型プロジェクト研究として、秋田県と共同による「風力エネルギー利用技術に関する研究」や文部省科学研究費補助金による「ネパール王国古王宮の研究と保存対策―現地調査」の国際的研究などは、教員の研究意欲のみならず、学生の向学心の高揚にも大いに寄与している。

本学は創立以来十有余年を経て、ほぼ所期の目標に到達したと考えられる現在、六千名に及ぶ卒業生を輩出し、産業界や教育界から高い評価を得ており、現実に社会の要請にこたえてきた。

このように、内部的に充実し、研究・教育に対する気運の盛り上がりは、本学のより一層の質的向上へと発展・飛躍していくことが自然の成り行きであろう。

近年、激しいいきおいで進む技術革新のなかにあって、優れた研究開発能力をそなえたエンジニアが、四、五年前とは比較にならないくらい、強く望まれている。そのニーズに対応するために修士課程を設けて、大学としての責任の一端を果たすべきと考える。すなわち、実務能力を素養として、技術革新に寄与し対応できる技術者の養成と、本学構成員の基礎・応用両面にわたるより多くの研究成果をあげることが、社会への貢献であり、責任である。

このたび設置する大学院修士課程の募集対象の中に、本学の趣旨を反映させる意味から、とくに工業教育にたずさわる現職教員も含めている。これは、現職教員の専門的知識や能力の開発と向上が、教育現場で活用され、その波及効果が大きいと考えられるからである。

大学院工学研究科の設置によって、本学の歴史にエポックを刻むことになる。

4面から6面にかけて卒業生名簿と卒業計画（研究）一覧が掲載されています。

発行所
日本工業大学
広報課
埼玉県南埼玉郡宮代町
郵便番号345
電話04803(4)4111

Clean & Green
学内の美化に協力をお願いします。

卒業生に贈る言葉

学長　三浦　靱郎

自信と勇気をもって、元気に働いてもらいたい。

私が諸君に贈る言葉はこれがすべてであるが、少し説明を加えておく。

諸君はいつも元気でなければならない。健康はなによりも大切である。健康でないと自信も勇気も持つことはできない。

何事も自信をもってやらなければならない。自らを信じて働くのである。四年間の学業を終えた諸君は自信があるはずである。もしも四年間を顧みて、まだ努力が足りなかった、と思う人がいたら、欲には限りがない、諸君は十分に自信をもつ資格がある、と言っておきたい。

何事にも勇気をもってぶつからなければならない。新しいことには必ず不安がつきまとう。その不安を払いのけるには、勇気しかない。

これで説明も終わったのであるが、もう少しつけ加えておく。以下は蛇足である。

私が大学を出たのは昭和九年である。昭和九年というと満州事変の三年後、日中戦争の始まる三年前である。まさに暗澹たる時代であった。だれも履歴書を何枚も書いて、右往左往していた。文学部の卒業者だけはのんびりしていた。どうせ勤め口がないことがはっきりしていたからである。

大学院に二年いて、ようやく勤め口が見つかった。それが内定したとき、親しい友人二人がお祝いをしてくれた。場所は新橋で、深い雪を踏みわけてその料亭の前まで行くと、入口に重機関銃がでんと据えられていた。慌てて人形町に河岸を変えた。二月二十六日だったのである。それから五年たって第二次世界大戦が始まった。

諸君は、その戦争の傷跡がすこしずつ直りかけてきたころに生まれ、朝鮮戦争を境にした高度成長の中で育った。そして現在、経済界は未曾有の活況を呈し、かつての世界五大強国、三大強国に代わって、経済の面でアメリカおよびヨーロッパ全体を相手に渡り合っている。若い者の力が求められているから、求人は降るようにある。私が大学を出たころと較べると、まさに雲泥の相違である。

ちかごろ私は、幸福とは何だろうか、とよく考える。常識的に言えば、雲の上にいる諸君は幸福で、泥沼に生きてきた私たちは不幸だったということになる。

しかし私は考える、環境がその人の幸・不幸を決定するものではあるまい、と。逆境を克服して、逆境に育ったがゆえに大成した人はいくらでもいる。恵まれすぎたためにかえって挫折した例もある。環境が必ずしも幸福を保証するものではないのである。

そのあと私も戦争に駆り出され、帰ってからは家族を食べさせるのに苦労した。自分の研究に専心することができるようになったのは、四十を過ぎてからである。

しかし今そのころを顧みてけっして損をしたとか、不幸だったとか、考えていない。もちろん苦しいことはたくさんあったが、どんな環境に置かれても、私は精一杯に生きてきた、そして精一杯に生きることに私の喜びがあった。

要は、いつも精一杯に生きていくことが大切なのではないだろうか。精一杯に生きているときは、幸・不幸など問題にしない。幸・不幸を忘れてひたむきに生きていくときそこに真の意味での幸福があるように思うのである。

自分の幸福をすべて周囲に預けてしまうと、状況が変わるごとに、一喜一憂しなければならなくなる。日本の前途には必ずしも暗雲がないわけではない。諸君の前途にしても、何が起こるかわからない。

何が起ころうとも、諸君には自信と勇気をもって元気に生きていってもらいたい。

三専攻の設置趣旨と概要

機械工学専攻

機械工学は、本来さまざまな分野の技術を統括し、集約する学問であるが、ロボット技術などに象徴されるように知識集約化の傾向を強める日本の産業構造の変化にともなって、その役割と責任は一層大きくなってきている。このような社会的要請にこたえるために機械工学専攻では、①材料加工、溶接、熱工学技術をタテ糸に、ロボット、エレクトロニクスなどを横糸にして、産業現場を制御できる実践的エンジニアの養成に務める、②集団の課題であるエネルギー問題に対して未利用エネルギーの再利用、省エネルギー技術の研究・開発を進めていく、③新素材、複合材を用いた新しい設計開発の理念を探究していく、ことを骨子として教育・研究を展開していく。主要学科目として、機械要素設計、制御工学、熱工学、溶接工学、塑性加工学があり、これらの系列科目群として特色ある授業科目が用意されている。教授陣は学内研究教育スタッフのほか、非常勤講師として、東北大学名誉教授・横堀武夫氏（安全・強度特論）、早稲田大学教授・向殿素直氏（プロセス工学特論）、同大教授・川瀬武彦氏（流体動力系の力学特論）、石川島播磨水力サービス株式会社社長・亀田真哉氏（熱動力系の力学特論）、消防庁消防研究所主任研究官・亀井浅道氏（材料強度学特論）が加わることになる。

電気工学専攻

電気工学専攻

電気本来の産業である原子力発電をはじめとする電力機器、半導体装置などのエレクトロニクス製品、宇宙通信関係機器、高速大型計算機やパーソナルコンピュータなどの情報関連機器はもちろんのこと、各種の制御関係、産業ロボット、メカトロニクスなどほかのほとんどの産業分野にも進出し、電気関連産業の領域はますます発展、拡大していくことが予想される。これらの社会情勢をふまえて、電気工学専攻では、あらゆる産業分野で活躍ができて、急速な技術の進歩にも追随、他をリードするといった学際的に広い視野をそなえた電気技術者を養成することに主眼をおいている。

カリキュラムは、電気制御工学、電気機器学、電力工学、電磁基礎理論など電気本来の主要学科目を基軸に、それぞれに系列科目を配しているほか、「情物電気」や「画像工学」などを設けて研究・教育内容に幅をもたせている。教授陣は学内研究教育スタッフのほかに非常勤講師として、慶應義塾大学教授・森為司氏（プラズマ工学特論）、同大教授・坂田亮氏（材料科学特論）、同大教授・北川節氏（数値計算法特論）、同大教授・森真作氏（非線形回路理論）、宇都宮大学教授・奥田健三氏（制御機器学特論、情報処理特論）それに電気通信大学教授・鈴木務氏（通信工学特論）が加わる。

建築学専攻

建築学専攻

現代社会における生活環境は、科学・技術の発展により著しい変化を生じている。建築の分野をみても、大規模化・高層化が進み、広域にわたる土地開発も進められてきた。反面、人口集中による巨大都市化が人間性を疎外する現象を生み、深刻な社会問題をなげかけている。このような問題に対処するためには、都市における人間環境の確立を目的に、地域単位の都市建設が要請される。これには、都市防災工学・建築生産工学・都市環境工学などに基づく総合的な研究・開発が必要である。また、地震・火災・公害など自然界の外乱や人的災害から人間社会を護り、より豊かで安全な生活条件の確立も要請される。これらの社会的要求にこたえることのできる、幅広い能力をもった建築技術者を養成することが建築学専攻設置の目的である。

カリキュラムは建築構造学、建築構造力学、建築計画、地域計画、建築意匠に大別され、それぞれに系列科目をおいている。教授陣は学内研究教育スタッフに加えて、非常勤講師として、株式会社ソイルリサーチ副社長・北後寿氏（建築構造計画特論）。それに、宇都宮大学教授・吉岡担氏（建築材料特論）が予定されている。

'82 日本工業大学大学院（修士課程）募集要項

募集人員　工学研究科

機械工学専攻	8名
電気工学専攻	8名
建築学専攻	8名

出願資格

次のいずれかに該当する者。

(1) 学校教育法に定める大学を卒業した者、及び昭和57年3月までに卒業見込みの者。

(2) 外国において、学校教育における16年の課程を修了した者、及び昭和57年3月までに修了見込みの者。

(3) 文部大臣が指定した者。

(4) 本大学院において、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者。

出願期間　57年4月1日～4月13日

試験日

学科試験	4月14日
面接試験	4月15日

合格発表日　4月16日

学科試験の内容

①数　学
線形代数、微分積分学、常微分方程式から出題

②外国語
英語、独語、仏語のうちから1科目選択

③専門科目
機械工学専攻…材料力学、機械力学、流体力学及び流体機械、機械工作、熱及び熱力学から1科目選択
電気工学専攻…㋑電気工学基礎（電気磁気学、電気回路理論、電気用数学）→必須
㋺電気機器（自動制御含む）、電力工学、（高圧を含む）、通信工学、電子工学から1科目選択
建築学専攻…建築計画、建築史及び意匠、建築環境工学、建築構造力学、建築構造学、建築材料学から1科目選択

募集要項の請求やお問い合わせは…　日本工業大学教務課　〒345 埼玉県南埼玉郡宮代町須賀900　TEL. 04803-4-4111

―青春の一コマ―
翼なき飛行兵

榆井　武一

昭和十六年の夏、東京から満洲の奉天（中国の瀋陽）へ引越した。私が小学校五年生のときである。その年の十二月八日にはあの忌わしい悪夢のような太平洋戦争が勃発し、戦局が日本の総てを左右する運命となった。

十八年四月に奉天第二中学校へ入学する。私の家の前の道路一つ隔てて中学校の正門があり、通学する二中生の姿は私の憧れであった。合格を知らされたときの喜びはいまも忘れていない。

「歩調トレッ！　カシラー右ッ！、直れ、ゼンターイ止れ、解散！」一戦闘帽にゲートル、軍服姿いのカーキ色（国防色）の例服に身を包み、隊列を組んで歩哨と週番教官の立つ校門を通るのが毎朝の登校風景である。

教科目のなかで特別に重視されたのが軍事教練であった。また外地という軍事的条件からの要請もあってか実戦を想定した訓練も含まれていた。とくに零下二十度という厳寒での野外教練は苛酷だった。寒さ暑さを通り越し無感覚になった棒のような二本の足を引き摺り、時折寒風を切って突き刺す教官の怒号に震え、ただ前進あるのみである。このような教練も余程の理由がない限り欠席は許されず、ましてや少々の発熱程度では論外とされた。巷で、中学校を予備士官学校と称した所以である。

この年の五月に、日本軍のアッツ島守備隊が全滅し、戦略的には守勢にまわり、戦局は下降の様相を呈する。十九年六月米軍サイパン島上陸、十一月B29日本本土爆撃開始。

私が二年のある日、突如、三年以上全員講堂へ集合！の命が下った。校長が、一刻を争う戦局の厳しさを説明し、そしてこの困難な戦況を救えるのは諸君達の若い命だ、戦場で華華しく散って呉れ！とばかりに予科練志願を強要した。試験当日校長が引率し試験場へ押し掛けた話は有名である。マスコミは挙って軍国の校長と讃えた。九月に百人以上の生徒が、甲種飛行予科練習生十五期として入隊した。

この頃になると軍当局の焦りも一段と増し、海軍省は、二十年度より海軍兵学校の予科新設と甲種予科練の年令一才引き下げを発表した。いずれも受験資格は中学二年以上である。

私は躊躇なく先輩に続けとばかり親に内緒で志願した。しかし、クラス担任の沼田嘗先生（渾名はガマ）は、私の予科練行きには反対だった。急いでいま行くことはないというのである。

一年前東京のある女学校から国語の教師として赴任してきたガマ先生であるが、私は当初から馴染めず軽蔑していた。それだけにこの時は、憎悪が込み上げ、「ガマの国賊奴！」と怒鳴りたかった。不断からしてガマの態度は非国民的であった。朝礼や式典において、校長や軍事教官が行う精神訓話を厳粛に聞き入る生徒の前で、総てを否定するかのような不真面目な顔つきで空を見上げたり、生徒の規律ある陸軍式の敬礼の挨拶に対し、いつも不貞腐れたポーズを示した。実はこれがガマ先生の戦争と軍国教育に反対する意志表示であったことに私が気付いたのは、戦後もずっと後のことである。私は先生の信念と勇気に感服し、いまや私の最も尊敬する教育者となる。心残りは消息不明につき一度もお会いすることができなかったことである。

二十年四月一日、私は、十六期生として、鳥取県の美保海軍航空隊へ入隊した。

既に硫黄島は陥落し、沖縄戦が始まり、戦局の帰趨は決定的となり、絶望的抗戦を展開する。

美保航空隊には、鳥取・島根・京都・滋賀・福井・石川・朝鮮・満洲からの出身者一四一八名が入隊し、そのうち朝鮮・満洲からは併せて八五六名を数える。

予科練の訓練内容は省略する。

沖縄戦は、小学校六年生以上の男子全員を駆り出し、義勇隊を組織して軍に協力させたが、米軍の火力には到底及ばず、六月下旬、軍司令官の自決によって終った。

六月十五日、海軍大臣の飛行予科練教育中止命令により、全員各地の実戦部隊に編入される。私は、長崎県針尾海兵団の特別陸戦隊喚進砲中隊を経て特攻中隊に編入される。われわれの中隊は、西彼杵半島の北の面高村（?）の小学校の分校に陣を構えた。隊の任務は、M4戦車に爆薬を抱え肉弾体当りである。二十四才の中隊長を最年長に下は乙種予科練の十三才であった。私は十四才である。当時一般に、人生十八年といわれていたが、私は十五才と心に決めていた。

死こそ、純潔・崇高・美の極致そして青春なりと考えていた。教育とは恐ろしいものである。

八月十六日、一日遅れて敗戦を知る。死に場所を失った我々は、一部にゲリラ隊組織の動きもあったが、二・三日呆然と過ごした。数日後、針尾に引き揚げ、手続き完了後復員の途につく。結局は満洲へは帰れず、満員の無蓋貨車に二日間も揺られて漸く東京に着いた。しかし、焦土と化した東京では祖父も捜し得ず、千葉県の大貫町の母の実家に身を寄せることになった。

飛行予科練十六期は、実は戦備作業要員として徴募されたに過ぎず、入隊以前から「悲なき飛行兵」だったのである。

このような異常としか言い難い体験も、いまとなっては矢張り懐かしい青春の想い出である。しかし、異常な体験は絶対に繰り返してはいけない。

翌年八月、家族全員無事帰る。

研究室では ⑫
電子部品研究室

ドライブコンピュータ、オフィスオートメーションその他最近のエレクトロニクスの発展は一層目ざましいが、これらの発展において地味ではあるが重要な役割を果たしているのがスイッチ、リレー、コネクタ等の電気接点である。

電気接点は電気が実用に供されて以来、回路の開閉に不可欠のものとして用いられてきたが、その重要性はアポロ計画の遂行上、接触部品の不具合が大きな問題となったことからもわかるように、機器全体の死命を制するものである。このためNASAの研究費のうちかなりの額がこれら接触部品の研究開発に向けられたという。本研究室の重要テーマの一つがこの電気接触現象、なかでも接点開閉時の火花・アーク等の放電現象の研究であり、その研究成果は国内外の学会雑誌、数回の国際会議等で発表されている。

研究室のテーマはさらにマイクロコンピュータによる計測、制御（特に電動機制御で、エネルギー問題と関連した電動機駆動特性などにも広がっているが、ここでは接点開離時の現象の一端を紹介する。

下の写真は金接点が開く際の接点電圧および電流の時間的経過を示す例である。横方向が時間で、左から右の方向に一つの正方形わく（横方向に十ヶ）をこえる毎に百万分の二秒経過する。中央の目盛付水平線が電圧と電流の零位置を示し、上方向が電圧の、また下方向が電流の正方向である。

最初に接点が閉じている時電圧は零で、約〇・六アンペアの電流が流れている。接点が開き始めると電圧は急上昇し、百万分の二秒で一・二ボルト程度に達し開離する。その途中、約〇・四ボルト付近にときおれが見える。（電流は電圧上昇中小さく振動しているが、開離後は振動しつつ零に収束する。）

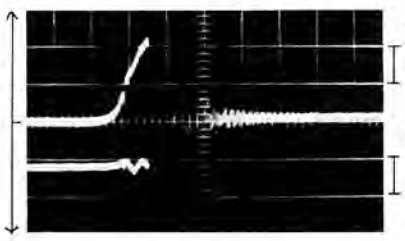
静止接触理論によると〇・四ボルトの時の接触部の最高温度は約千百度（金の融点に相当）、一・二ボルトでは約三千二百度（金の沸点をこえる）となる。すなわち、この間は金が熔融して接点間にあめのように伸びた状態（ブリッジ）であり、約百万分の一秒のうちに蒸発して破壊すると考えられる。

ブリッジ破壊後の火花（アーク）発生の有無はさらに極めて短い時間（一億分の一秒程度）で決まるとされている。いずれにせよ、このような放電現象は極めて高速であり、その解明は必ずしも容易ではない。

さらに接触現象全般としては、大気汚染（亜硫酸ガス等）による表面皮膜の形成、リレー等の構成材料プラスチックから出る有機ガスの影響、材料の製法等々、問題は多岐、かつ複雑なものとなる。

一方ではいわゆる電子スイッチの開発も盛んであるが、①導通時の抵抗が数ミリオーム以下、②リレー等で入力側と出力側が電気的に分離可能、という二つの決定的特長を持つ電気接点の重要性は今後とも滅ずることはないであろう。電気接触現象に関する研究において、今後とも世界のトップレベルを目ざして研さんを続けたいと思う。

（高橋篤夫助教授）



2月1日付 教員人事異動

五十六年二月一日付教員人事の異動があり、四氏がともに本学専任講師となった。四氏は、機械工学科寺島幸雄、電気工学科山口義昭、建築学科小笠真一郎、システム工学科正道寺勉。

寺島幸雄講師

昭和十九年十一月五日生。四十五年三月工学院大学大学院修士課程修了。同年四月本学機械工学科助手となる。現在伝熱制御工学研究室所属。熱交換器の制御と流れの問題――特に弁関係の研究を進めている。おもな論文に「二次元モデル弁による流れの視察について」など多くの論文を発表している。実験などを担当する。

山口義昭講師

昭和二十年二月十八日生。四十八年東京電機大学大学院工学研究科修士課程（電気専攻）修了。四十四年四月本学電気工学科助手となり現在に至る。廣瀬治男研究室に所属。電磁波のコヒーレンシーに関連した研究を中心に、「不均一強度分布のインコヒーレント平面光源により生じた波動場の空間コヒーレンス」などの多数の論文がある。「電気磁気学」と実験を担当。

小笠真一郎講師

昭和二十二年十一月十二日生。四十八年三月日本大学大学院理工学研究科建設工学修士課程修了、四十九年三月国立公衆衛生院専攻課程環境科学科卒業。同年四月本学建築学科助手となる。環境工学研究室所属。空気清浄に関する研究が多く、「室内空気汚染拡散に関する基礎的研究」のほか多数の論文がある。「環境工学」と同実験・演習担当。

正道寺　勉講師

昭和二十四年九月十五日生。五十年三月青山学院大学大学院理工学研究科経営工学専攻博士課程修了。五十三年四月本学システム工学科助手となる。吉村研究室に所属。数理計画法の中でも特に非線形計画法のアルゴリズムに関する研究が中心で、「非線形計画問題に対する一次元探索手法」など多数の論文を発表している。「多変量解析」「経済性工学」を担当する。

冬日迷想

三浦靱郎

冬の日の想いは、とかく過ぎ去った日々に向けられる。花が咲いてはじまる一年は、葉が散って終わる。冬は、自然がそうであるようにわれわれにとっても、回想と決算の時期である。

一年の回想にはじまる冬の想いは、しだいに時代を溯って、ついに幼い日に辿りつく。このごろの私はとくに幼い日の想い出に執着する。年のせいにちがいない。

小学校に入った日、送ってきてくれた父の姿が見えなくなると、思わず涙がこぼれてきたこと。電車から降りるとき足を滑らせて倒れると、父が車掌をどなりつけ、しばらく電車が停まってしまったこと。もっと時代を溯ると、角兵衛獅子の女の子がうちの縁側でからだをくねらせて逆立ちしあの子は人攫いにさらわれたんだよ、お酢を飲まされてあんなにからだが柔かくなったんだよ、と母に聞かされて、かわいそうでしかたがなかったこと。そしてそういう想い出の中に、炊きたての麦飯のいい匂いが流れてくる。

幼い日の想い出は、その場面だけがなんのつながりもなく目の前に現われる。しかも、つい最近経験したことのように、鮮明である。

天井に梁の見える広いお勝手、その冷たい板敷の上でランプの火屋を掃除している。そばに汚れた新聞紙が丸めて放ってある。天井に近く、裸電球がひとつぶらさがっている。しかし想い出すのはその場面だけで、それが幾つぐらいのことなのか、どこの家でのことなのか、まったく分からない。

突然そのように浮かび上がってくる記憶とは、いったいどういうものなのであろう。

人類の先祖はむかし海の中を泳いでいた。それから陸に上がり、地上から木の上に登り、また地面に降りてきて二本足で歩くようになって、ヒトになった。その何千万年か、何億年か前の経験が、いまだにわれわれのからだの中に生きているという。話がそこまで行ってしまうとうっかり信じられないが、あながちでたらめだとも言い切れないような気がする。

人間の魚的な性格は別としても、われわれの一生は一日一日の経験の積み重ねで、その中には忘れてしまったと思っているものもあるが、それも実は忘れたのではなく眠っているだけで、あるとき、なんのきっかけもなくパッと目を覚ますことがあり、眠っていながらも、意識はされないながら、われわれの日常の思考と行動に大きな影響を与えている、そんなふうに思われるのである。

ちかごろ親の仕事の関係で外国で幼・少年時代を送る者がふえている。子供は順応性があるから、すぐに現地の言葉を覚え、現地の子供と仲良しになる。母親よりもはるかに開放的である。しかし、帰国して二、三年もするとすっかり忘れて、日本を一歩も出なかった者とまったく変わりなくなる。だからむだなことはやめて、子供は日本人学校に入れて日本語で教育を受けさせるのがいい、と考える親がいる。

だれもが持てるとは限らない外地での経験は、そこから離れれば、忘れてしまうように見える。しかしそれは眠っているのであって、いつか、なにかの機会に目覚めてくることがあるに違いない。言葉もそうである。

チーズやオリーブ油の匂いが漂ってくると、遠い日の想い出がつぎつぎに甦ってくる子供もいるであろう。私はそれを豊かであると考える。

幼いころ、父は私をほうぼうへ連れていってくれた。銀座のパウリスタでまだ珍らしい珈琲を飲み、ドーナツを食べたことがある。まっ暗な道を歩いて、そこだけが明るい築地小劇場にも何回か行った。大震災のとき、火が鎮まるとすぐ、東京じゅうをいっしょに歩き回った。冬の日の、幼い日の想い出の中には、いつも父と母がいる。

日々是生甲斐を

機械工学科・長田　重慶

諸君！まずは卒業おめでとう。幼、小、中、高、そして大学と長い永い学業生活に一応の終止符を打って明日からいよいよ自力で人生の航路に出航することになった訳ですね。いつも出航には希望と不安とがあるもので す。そこで人生の一先輩として3言ぐらいアドバイスしようと思う。

さて人生で一番幸せな事は何だろうか……。それは〝日々是生甲斐〟につきる。では生甲斐を常にもつには何が必要だろうか……。それは一生を貫く事ができる仕事をもつことです。

だが諸君が今その仕事を発見する事は困難です。しかしその仕事は既にどこかで君を待っています。それは又丁度君の奥さんになる人が既にこの世のどこかにいるのと同じように。

大多数の方々は企業に就職されて明日から出勤される訳ですが、将来諸君が責任ある地位になり、第一線で活躍するのは、多分二十一世紀になるでしょう。その時毎日に生甲斐を感じ充実した日々を送っているか、又は後悔の日々であるかに別れています。だが今現在のスタートラインは同じです。公平です。

諸君は今まで充分に頭の休養をとってきた訳だからスタミナがたまっています。張り切って下さい。でも長い人生のマラソンでは疲れる事もあります。疲れたら休みなさい。無理のない小さな努力を持続しなさい。友人と酒を飲むのもよいでしょう。ただグチや仕事の話をサカナにして飲むのはやめましょう。

では今までの効能書を実行するため、少し荒療治の方法を教えます。君が今度、就職した会社で一生の仕事を見出す確率は非常に低いと思いますが、今すぐ退職したら確率は0に近いから、出社しなさい。そして少なくとも3年間は毎日馬鹿みたいに「ハイハイ」と返事をして素直な心で精励して下さい。そうすれば自分が何かが分かってきます。もしその時に君が今の会社で生涯を見出すものがあれば大変な幸運児です。もし不運な場合にも既に素直に過ごした3年間の成果は君に正しい判断力を与えるでしょう。だが大変な不運な時には相談に来て下さい。ただし甘えは困ります。

次に意志の弱い人のために一言！　大多数のサラリーマンは月給取りであるために意志が弱い人が多いようです。私も永年会社勤めをしましたが、よく「一年の計は元旦にあり」などと言って今年こそ……をしようと思いながらほとんど実行されません。小さな努力でさえ持続できません。そんな人のために一番よい方法を教えます。それには「ホラ」をふく事です。それもなるべく多くの人にふいた方が効果は大です。ホラをふいた以上実行されないと、君は信用を失うから大変です。だから努力します。又「ホラ」をふく事によって常に目的を意識しますからチャンスを失いません。時に、あのホラが当たねなどと陰口を言う人がいますが、当ったのではありません。当てたのです。

大分、くだらぬ話ばかりしたようですが、少なくとも諸君は大卒です。大卒であるための重荷、世間の期待と時に軽べつとが交差します。自由度は今までのようにはありません。人間に生まれた以上仕方ない事です。

だが人間だからできる事は無限です。

さあ、元気を出して下さい。そして君にしかできない事があるような、そんな人になって下さい。それが人間に生まれた事の義務かもしれません。

では、ごきげんよう

サヨウナラ

始めが肝心

電気工学科・大久保勝弘

ご卒業おめでとう。

諸君が本学において、四年の研鑽を積み、希望に満ちた若い技術者として、いよいよ社会へ巣立って行かれることを心から喜んでいます。

君達は、本学の十二回目の卒業生です。昭和四十六年に、一回生が卒業して以来、すでに六千を超える日本工業大学卒業の若い技術者が社会の多くの分野で、着実に活躍しています。君達も、いよいよこれから先輩達の仲間入りをするわけです。どうか、清新の気あふれる若い技術者として社会に新風を吹き込む意気込みで頑張って下さい。

振り返ってみれば、私が大学を卒業した今から三十年程前には、わが国は太平洋戦争の敗戦による痛手から未だ十分に立ち直っていない状態でした。当時は産業界も、その後に到来する好景気の時代の幕明け前の混沌とした難しい時期でした。電気関係でいえば、テレビジョンは未だ試験放送以前の段階にあり、電子・通信分野へ就職する者は、誠に微々たるものでした。トランジスタが漸く使われ始めた頃でしたから、ICはもちろん、サイリスタも未だ開発されていませんでした。また、今日、世界の一、二を競うわが国の自動車工業も、当時は盛んに欧米の先進自動車メーカから技術導入して、細々と生産している段階で、国産車は外国車に一段も二段も見劣りしていました。今日から見れば全く隔世の感があります。

その後の数次にわたるわが国における経済の躍進・技術の発展は、ご承知のように実に目ざましいものがありました。そして今日に至りました。その間、何度も難しい時期もありました。その最大のものは、九年前のオイルショックでした。これらの全期間を通じて、はっきりと言えることは、わが国の目ざましい発展は、工業技術の急速な進歩によるところが甚だ大きいということです。

今後、国際的に省エネルギー、省資源、生活レベルの向上などに対する要請は、ますます強まって行くでしょう。また、このところ、わが国の輸出超過に関連して、日米あるいは日欧の経済摩擦について、緊迫した状況を伝える記事が連日新聞を賑わしています。この問題の解決には市場の開放等にともなう国内経済に対する相当のショックが心配されています。わが国が、これらの要請に応え、問題を解決して繁栄を続けてゆくためにはこれまで以上に、科学技術の開発研究・工業の進展・互恵平等の心がけなどが重要になるでしょう。

このような世界の情勢と技術の動向を考えれば、諸君が第一線で技術者として活発に生き抜いてゆくためには、自から絶えず技術的能力を積極的に向上させるように努力する以外にはないと思われます。

卒業後、技術者として活躍する期間は、ほぼ三、四十年というところでしょう。以前から、大学を出て一人前の技術者になるには業種とか企業の規模にもよるが比較的大きい所で、五～十年、課長になるには、十五～二十年を要すると言われています。しかし、それには、始めの二三年が特に大切で、多くの企業で、この間に各人の将来の路線の方向がほぼ決められる例が多いとも聞いています。やはり、「何事も始めが肝心」なのです。この事をくれぐれも忘れないで下さい。

技術系の企業では、新人社員に対して社員としての心がまえや、基礎的な技術についての講習会を開催したり、先輩社員を一対一で割り当てて実習を行うなど厳しい訓練を実施する例が多く見られます。新入社員としては、学生時代とは異なった相当の覚悟で臨むことが必要でしょう。

大学は、いつでも門を広く開けて君達が訪ねてくれることを歓迎します。思い迷うことがあったら、あるいは、ぶらりとでも結構ですが、研究室へ来て下さい。先生方も、君達の活躍と発展を願って、きっと応援して下さるでしょう。

主任教授から卒業生へのメッセージ

己れを耕せ

建築学科・木村　蔵司

卒業おめでとう。何はともあれお祝いを申し上げます。四年間の苦労がここに結実したというべきか。諸君は志を抱いて故郷を出て我が日本工業大学で研鑽これ努めてきたのだ。その甲斐あって今晴れて卒業を迎えた。思えば苦しかったこと、悲しかったこと、くやしかったこと、嬉しかった事など随分経験してきたことと思う。勉強もそうだ。本を見るのもこりごりだなんて思う人は一人もいないだろうが、苦労の連続だった人はひと休みして英気を養って出直すのも良かろう。何といったって体が資本なんだからね。

それにしても諸君の卒業計画は実に立派だった。設計製図にしても調査実験研究論文にしても立派なものだった。もちろんこれらの成果は努力なくして出来るものではない。徹夜に次ぐ徹夜と最後の追い込みでは苦しかったろう。今になって見ればもう少し頑張れたはずだと思う人もいるだろう。しかしあれだけの成果が得られた経験を糧んじてはならない。俺にだってやれば出来るんだという自信を持ってもらいたい。こんな苦労などもう二度とないんじゃないかな。諸君は卒計というトンネルに突入はしたものの、周りは真暗闇、わずかに周囲に友達のいる気配はある、声もかすかに聞えるが自分の行く手をはっきり見つめるには霧が多く、電灯も暗く、手探りで進むしかない。そんな気持で不承不承取り掛からざるを得なかったのではないだろうか。

先生の方では何でも良いから聞けと言うが、下手なことを聞いたらこんな事が分からないのかと頭から言われてしまう気が先に立つ。どういう風に言って聞いたら良いのか聞き方が分からないのだ。余り難しい文章など読む事は得意ではないから仕方がない。やっぱり自分の勉強不足と恐れ入って聞くのも躊躇する。とはいってもやらない事には前に進まない。トンネルの入口は広く見えたが中は狭い。後戻りすれば誰かにぶつかって人の進路を防害する。仕方なく自分も前へ進んでみる。そんな事の積み重ねで一月に入ってやっと出口がはっきり見えるようになったのかも知れない。それから先は元気百倍。それこそ徹夜したってちっとも疲れなかった。自分の努力の成果が目の前にたまってくるのを見るのは楽しいものだ。先生にも良く叱られたり、おだてられたりした。こんな生活が学生生活というんではないだろうか。そう思いませんか。

ところで諸君は明日からは大学に来なくても良いんだ。いや来たってロッカーなんかないぞ。家に帰るしかないんだ。家では諸君の卒業証書を首を長くして待っているからだ。遠慮せずに堂々と見てもらえ。そして喜んでもらうのだ。親たるものそれが何よりの喜びなんだ。良くやったなあなんて口に出して言う程センチを味わっていられない世の中だが、気持ちの上では純真に喜んでくれるはずだ。この辺の気脈が血の繋がりというんではないだろうか。

休んだら今度は翔べ。実力は正に立証済みだ。憶病風など吹き飛ばせ。学生時代のように尻込みしていては駄目だ。自分が引張って行くんだぐらいのけんいん車たれ。しかし礼儀は忘れるなよ。諸君の職場には諸君より年かずの多い人が大勢いるんだ。諸君の両親ぐらいの人に混じって仕事をして行かなければならないのだ。それでいて仕事の責任は若い自分にある。大学を出たからには仕方がない。この人達に仕事を命じなければならない立場に立たされるのだ。そんな時諸君はどうするんだ。やれなんて命令したって人は動いてはくれないぞ。朝会社に出たらだれかれ構わず頭を下げろ。黙って下げたって駄目だ。お早ようございますと声を出して挨拶するんだ。何日か続けているうちに向うからも挨拶してくれるようになるだろう。こうなればしめたもんだ。重い物は自分が持て。人のいやがる仕事は自分が率先してやれ。辛抱するんだ。これが人生だよ。『己れを耕せ』

祝卒業

君たちに栄光あれ

建築学科・横内　龍雄

卒業生諸君おめでとうございます。

それぞれ新しい社会へと胸ふくらませて、スタートしていくことでしょう。

そこには学生生活と全く違った厳しい仕事がはじまります。

大学とちがって今日はあの講義をさぼってやろうということは許されません。これからは午前××時から午後　時までというように時間でしばられます。

急ぎの仕事があれば、休日出勤、早出、残業をしなくてはなりません。しかも独りだけの仕事ということはほとんどなく、組織の一員として、歯車の一個として大勢の人と共に働くわけですから、とくに人間関係をうまくやって行かなくてはなりません。

こういう社会の仕組みの中で、勤め人は出世をしていかなくてはなりません。それには人並み以上の努力と勉強を能率よくやっていくことが大切です。

自分に与えられた仕事の中で何が最も大切かをパレート図として考え、その重点に対して精力を傾けることです。そして担当した仕事のエキスパートになりなさい。

勤務にも人生にも、山もあれば谷もあり、晴天もあれば嵐もあることは、私は身をもって体験して来ました。

こういうときに共に喜び合い、慰め合える真の友を少しでもよいから確保すべきです。

おそらくこの大学時代の親しき友がその役割を果たしてくれるでしょうから、これから先その関係を大切にしていくべきでしょう。

仕事にいきづまったら、大学を利用しなさい。研究室の先生に遠慮なく相談して下さい。

人生も仕事も緊張の連続では参ってしまいます。必ず息抜きの時間を持って下さい。この調節をうまくやらないとノイローゼになったり病気になったりします。

何といっても身体が資本です。積極的に健康づくりをやりなさい。

最後に三つばかりの考え方をのべます。

自分の言葉に責任をもちなさい。

いいかげんなことや調子のよいことは決して言わないことです。言ったことは必ず守り、信用を得ることです。

つぎは、借りをつくらずむしろ貸しをつくることです。人にしてもらったり、他人より恩恵をこうむるより、他人にしてあげる、あの人とつき合うと得をするというように、精神的にも物質的にもしたいものです。

最後に安全サイドの考え方です。

たとえば、穴を加工するときは小さ目に、軸を加工するときは太めにつくる心掛けだと失敗を最小限にくいとめられるということです。

では社会へ元気でスタートして下さい。

秋の学祭には必ず来て下さい。待っています。

56年度卒業生名簿

これは57年3月20日付
卒業確定者の名簿

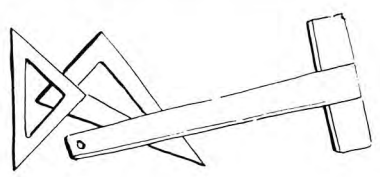
機械工学科

A組

B組

電気工学科

A組



以上 二〇〇名

B組

建築学科

以上 一八九名

B組

（5面につづく）

卒業計画（研究）一覧

機械工学科

〔長田重慶研究室〕

〔大川勝慶・村川正夫研究室〕

〔池田義雄・小倉　勝研究室〕

以上　八十八名

〔鈴木　昭研究室〕

〔柳沢　章研究室〕

〔横谷貞一郎研究室〕

〔酒井茂紀研究室〕

電気工学科

〔畑田英毅研究室〕

〔天久保勝弘・片山滋夫研究室〕

〔高橋逸二研究室〕

〔桑田正信研究室〕

（つづき9面へ）

システム工学科

以上　十七名

〔石崎敏三研究室〕

〔町山忠弘研究室〕

〔小高寿夫研究室〕

〔渡辺　寛研究室〕

〔漆原富士夫研究室〕

〔玉木　保研究室〕

〔八田　寧研究室〕

〔中道一郎研究室〕

〔鷹瀬治男研究室〕

〔高橋義夫研究室〕

〔堀田勝章研究室〕

〔佐伯正盛研究室〕

〔秦野真佐親研究室〕

〔木村敏司研究室〕

〔広瀬洋一研究室〕

〔三吉正光研究室〕

建築学科

〔堀原正典研究室〕

〔宮坂修吉研究室〕

〔廣川勇一郎研究室〕

〔高橋　恒研究室〕

〔雛波恒夫研究室〕

〔篠井武一研究室〕

〔渡辺勝彦研究室〕

〔桑原文夫研究室〕

〔伊藤庸一研究室〕

〔波多野　純研究室〕

〔横内雄雄研究室〕

〔曽田　昇研究室〕

〔杉本安次郎研究室〕

〔本間鶴千代研究室〕

〔吉村　浩研究室〕

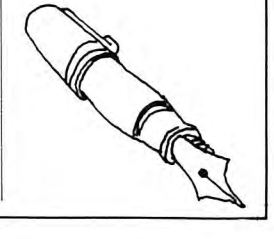
システム工学科

〔飯倉清雄研究室〕

〔宮井正弥研究室〕

〔土井　誠研究室〕

〔建築系研究室〕



海外学術調査

ネパールの僧院と山岳王宮

波多野　純

ヒマラヤの白き峰々に抱かれた小さな国ネパール。魅力的なのは山ばかりではない。中世からの伝統様式を踏襲する建物が、王宮に、寺院に、民家に数多く残っている。その中で昔と変らぬ生活が営なまれている。信心深く心やさしい人々によって古くからの宗教儀式や伝統行事が守られており、毎週のように町のどこかで祭が催されている。

私たち日本工業大学ネパール王国古王宮調査団が、この国の各地に残る古王宮の学術調査を始めたのは五十三年であり、すでにまる四年が経過している。

五十六年度には、二つの大きな仕事をすることができた。ひとつは今までの成果をまとめた報告書の出版であり、もうひとつは十二月の現地調査である。

ネパール建築の魅力

ネパール王国の首都カトマンズとその近くの町パタンとバドガオンにある古王宮は、れんがと木を実に巧みに使い分けた美しい建築である。基本的な構成は、二～四階建の中庭をとり囲む建物と、高い望楼風の塔からなっており、日本の城郭建築や五重塔と、雰囲気の上で共通性が感じられる。このような建築様式はどこから伝来したものだろうか。

カトマンズは、中国のチベットとインドの間を結ぶヒマラヤを越えた通商路の接点にあり、古くから商業が栄えてきた。この通商路に乗って、中国の建築とインドの建築が伝わり、熟成され育くまれ、この国独特の建築様式が形成されていったのだろう。

したがって、ネパールの建築史を研究することは、この国の範囲にとどまらず、東洋建築の大きな流れの中に位置づけられ、ひいては日本建築のルーツを探ることにも結びつくと考えられる。壮大なテーマであり、夢のふくらむテーマである。

ところがこの世界的な文化財は、長年の風雨のためにひどく傷んでおり、早急な修復が望まれている。私たちの調査も、この要望にそって、王宮の正確な実測図づくりから始められた。

チャルマティ・ビハールでの食事儀式

ヌアコットの村と王宮

『ネパールの王宮建築』出版

五十三年度から五十五年度までの調査の成果を『The Royal Buildings in Nepal』（和文名『ネパールの王宮建築』）としてまとめ出版することができた。

この出版にはいくつかの目的があった。まず、ネパール王国政府の文部省、考古局に対する調査の報告と、成果の現地還元である。さらに、世界的な研究体制の中で私たちの研究を意義あるものとして位置づけることである。したがって報告書は英文を主体とし、和文のテキストを加えた。

内容を簡単に紹介させていただく。まず、カラー一八ページ・白黒二五ページからなる写真版があり、王宮建築の全体像から細部に至るまでが、パタン、カトマンズ、バドガオンの各王宮の順で並べられている。

本文は、序編、第一章王宮建築の現状、第二章王宮建築の分析、からなっている。

序編では、調査の目的や意義、調査経過、ネパール王国の歴史と建築の概要などが述べられ、ネパールの王宮建築の概要を知ることができる。

第一編では、各王宮について、王宮の立地や、外観および内部の現状が詳しく報告されている。

第二編は、四章から成っている。第一章配置および平面の構成―では、中庭を囲む王宮建築の形式について、平面の上での民家や仏教僧院との共通性を指摘し、さらに中庭形式の建物の平面計画や設計寸法について試論を展開している。

第二章―王宮建築の構造―では、実測調査の成果をふまえ、王宮建築の構法を分析し、さらに第一章と共通して、王宮建築の民家や仏教僧院との共通性を構造の面から分析している。また、層塔について、いくつかの実例を挙げ構法を解析している。

第三章―王宮建築の柱・方杖の様式―では、ネパール建築の特徴である豊かな彫刻の施された柱と方杖について、様式的な分類を行ない、さらに王宮建築以外の建築と比較して、意匠の変遷過程を分析している。

第四章―王宮建築の開口部の様式―では、柱・方杖と並ぶネパール建築の特徴である、装飾豊かな窓や出入口をとりあげ、パタン王宮の一六〇余の窓を形式の上から分類し、さらにその変遷過程を分析している。

本文に続いて、ネパール建築に関する用語の、英語・ネパール語・日本語による対照表が付けられている。

さらに、各王宮の実測図面が二四葉折込みの大判図で綴込まれている。これは、現地において、写真測量および巻尺によって実測した成果を、帰国後図面にしたものである。大変な作業量を要し、本学学生諸君の協力がなければできないものであった。

ネパールへ

報告書の印刷も出発に何とか間に合い、五十六年度調査団（団長・渡辺勝彦助教授、団員・藤岡通夫名誉教授・篠野志郎東京工大助手・遠藤勇東京工業高校教諭・黒津高行非常勤技術職員・波多野純）は、五十六年十二月四日成田を出発した。バンコクで一泊し、十二月五日カトマンズに到着した。飛行場には、日本大使館からの出迎えがあり、通関も順調にすんだ。その日から、考古局、文部省などへ挨拶にまわり、報告書を手渡した。考古局では、私たちの成果を大いに喜こんでくれ、今回の調査に関する許可を直ちに与えてくれた。

また、文部省では、前の考古局長であり現在審議官のR・J・タパ氏に面会した。彼はじっくり報告書を見た後、国王、総理大臣、文部大臣に献本するよう話をすすめてくれた。

その後の調査中にも、ネパールで調査を続けている、ドイツやフランスの研究者と会い、報告書を見せた。彼らは内容を評価してくれるとともに、ひとつの大学でこれだけの事業ができたことに、驚きの念を隠さなかった。

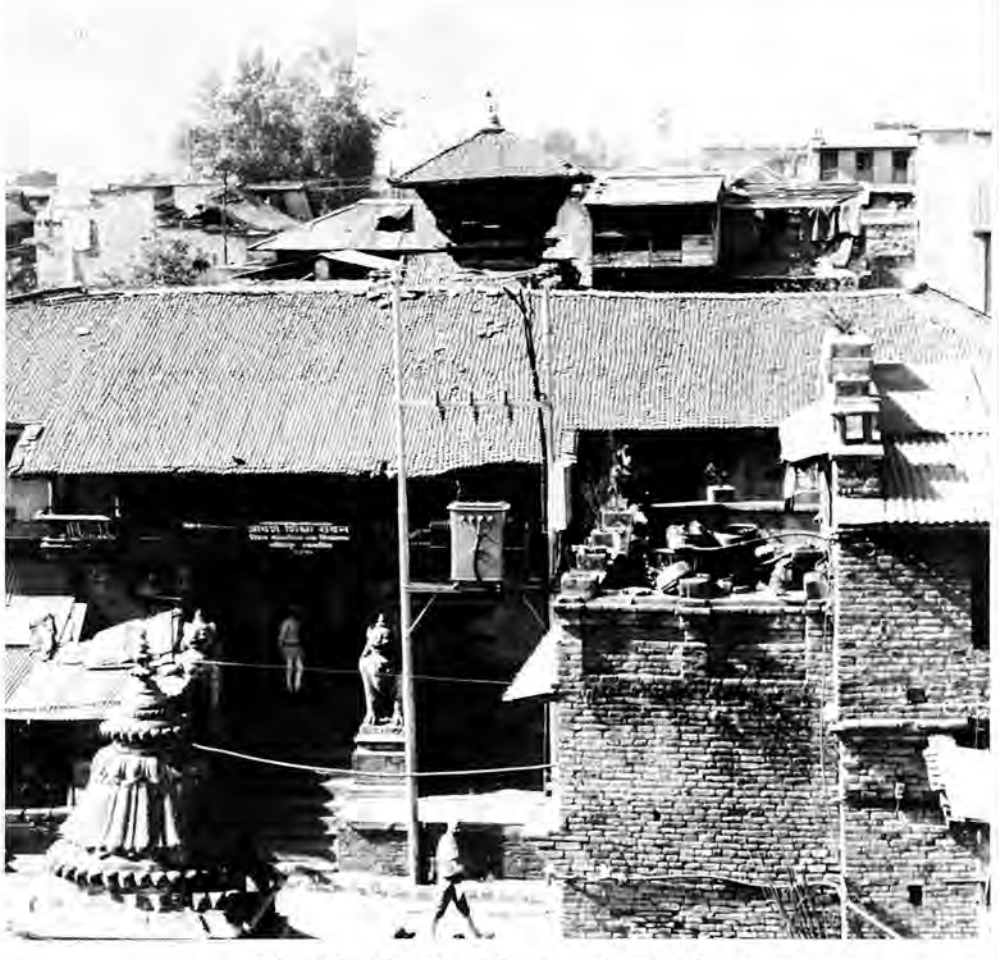
ヨーロッパからの研究者の多くが、現地に研究施設や住宅を持ち、ネパール人のアシスタントを雇い、一年の半分をネパールで過ごす研究体制をとっているのに対して、私たちの調査は三年分とはいえ、一回の調査が三週間という短期間である。それでいて、これだけの成果があげられたことについて、彼らとしてはかなりのショックであったようだ。

仏教増院の調査

今回の現地調査の目的は二つある。まず第一は、パタン王宮など都市部にある王宮建築について、中庭を囲む形式の建物に注目すると、その原型が仏教僧院にあるのではないかという、これまでの研究成果をふまえて、仏教僧院を調査することである。

パタン王宮にほど近い仏教僧院イ・バハ・バヒから実測調査を始めた。イ・バハ・バヒは中庭を囲む二階建の建物である。入口は東向きにあり、西棟の中央に神座のしつらえた塔が建っている。中庭を囲む各棟は開放的な構成をしており、現在は小学校に使われている。

実測調査の間も学校では授業が行なわれており、休み時間になると、子供たちが中庭へ出てきて、私たちの調査を物珍らしそうにながめにきた。そのうち、日本の童謡を教えてくれと頼まれ、大声で「もしもしかめよ」を歌う羽目になってしまった。重労働の続く調査の中では、軽い息抜きであった。



パタンの町にある仏教僧院イ・バハ・バヒの外観

中庭に向いて大きく開いた開放的な平面をもつイ・バハ・バヒに対して、カトマンズ郊外にあるチャルマティ・ビハールは対照的な構成になっている。

チャルマティ・ビハールも同じように中庭をとり囲む二階建の建物であるが、四周の建物は中庭に向っていくつかの小さな部屋に仕切られている。これらの部屋には入口以外に窓などの開口部がほとんどなく、内部はまっ暗である。おそらく、修業僧が各部屋に入り瞑想にふけったのであろう。

チャルマティ・ビハールの調査中に、たまたまこの僧院を管理する部落の人々による祭礼が行なわれた。朝のうちに牛一頭をばらし、口径一メートルもある大鍋で煮込み、昼すぎに食事の儀式が行なわれた。食事の順が伝統的に決められているのだろうか、美人だなあと気になっていた若い女性は最後にまわされた。

イ・バハ・バヒとチャルマティ・ビハールの二つの対照的な平面をもつ仏教僧院を中心に、数多くの仏教僧院の平面を採集することができた。これらを編年的に考察し、また実際の使われ方を分析することによって、王宮の成立過程を解明することが可能になろう。

ヌアコット王宮へ

今回の調査の第二の目的は、山岳部にある王宮の調査にあった。ヌアコットの山の上にある王宮は、サッタレ・ダルバール（七重の王宮）と呼ばれる望楼式の塔であり、カトマンズ王宮のバサンタプール・パワンと形態的にも構造的にも共通点があり、調査が必要となった。

十二月十一日、私たちを乗せたジープは、カトマンズを出発した。山の下の町トゥリスリ・バサールまでは三時間ほどかかった。ここからは徒歩で登る覚悟で出かけたが、運よく道が完成しており、山上のヌアコットの村に車で達することができた。

王宮は村の中央にあり、そこから歩いて五分ほどの所に小学校があった。この校庭に、シェルパ達の手でテントが張られた。これから四日間、このテントが住まいであり、調査基地となる。しばらくすると小学校の授業も終り、子供たちが私たちのまわりを囲み、まるで違う種類の生物を見るように不思議そうな目で見ている。食事の時など、皿の中をのぞき込まれ何とも食べづらかった。とは言え、テントの生活は実に快適なものである。食事はコックが作ってくれ、朝起きれば紅茶がテントに差し入れられる。顔を洗うと見れば、湯を運んできてくれる。自分でしなければならないのは、自分のための便所の穴掘りくらいである。おかげで調査に専念できた。

村人たちにとってこの王宮は自慢の種である。というのは、現王朝の始祖プリティビ・ナラヤン・シャハが、この王宮で最期を迎えたとされているからである。

夜には、村人たちが迎えに来て、王宮前広場で民族ダンスを見せてくれた。数人の楽士がつき、美事な民族衣裳をまとった人々による、愛の物語のオペレッタがくりひろげられた。月あかりの中に照らし出された出演者の顔は、実に美しかった。もっとも、恋人の女性役を務めた村人の顔を、電灯の下で見たら男性であったのには驚かされた。私たちのためにこれだけの会を開いてくれる親切な村人たちのことは生涯忘れないだろう。

調査も無事すみ、十二月二十四日に成田に帰ってきた。ご協力下さった皆様に心からお礼申し上げたい。（建築学科講師）

56年度 就職活動のまとめ

就職室室長　小高　寿夫

五十六年度の就職指導は完了しました。環境条件はすこぶる良く昨年度の求人ラッシュを更に上回る盛況でしたから学生は豊かな選択に恵まれました。

こうした状況を招来することができたのは全学を挙げての活動努力と、後援会の強力な支援があったからであり、更に同窓生諸君が母校の名誉を担っての職場活躍で認められたことの反映があったからである。

それに加えて各学科の就職指導委員各位（M科池田教授、E科八田教授、A科檜井助教授、S科杉本教授）の親身な努力傾注があったからである。

既況の中間報告は後援会報第一六号（五六・一二・一一）で既に行っているが最終的には、

M科　一一・二倍
E科　一二・二倍
A科　一〇倍
S科　一七・六倍

であった。また求人企業数の増加ぶりを学科別に見ると五十三年度を一〇〇として五十六年度は

M科　二四〇
E科　二五二
A科　二五五
S科　三一五

という急速な成長である。

しかし残念ながら地方求人は依然振るわず、その分布状況は関東地方の七八%、中部地方の八%を除く一四%を三三道府県で分かち合う状況である。

けれども来年度（五十七年度）からの地方就職には改善の大きな期待がある。

その一は、後援会（横尾会長）に地方就職推進のための委員会（野田委員長・後援会報第一六号）ができて、地方会員の全員が草の根運動式に情報の収集に走り回ってくれる組織的活動を展開することになったことである。これはまさに画期的事業である。これまではほとんどが放置無関心の大学教育に父兄が係り合いを持つことになるのである。これによって父兄は息子・学生と共通の話題と目標を持ち未来像を描くこともできるわけであり、また学生は目的意識を確かなものとして方向に沿った専門研究ができるようになるから、無気力漫然暮しは解消するにちがいないのである。

その二は、カリキュラムの大改革である。数学、英語を従来の三学級編成から四学級に編成替えして密度の高い少人数教育を徹底したことである。これによって今日までの指摘弱点を一挙に解決し、真に実力のある高級技術者に鍛えあげるのであるから大企業のきびしい就職試験にも十分に対応できるし従って地方就職も容易になると期待できるのである。

その三は、就職指導室の地方企業を対象とする、大学PR活動の一層の充実である。既に四年間連続実施して大いに効果を挙げているが、今年度は特に前記施策とぴったり息の合ったものとなすものである。

経済企画庁調べ（五十五年一月）によると、企業における人員配置についての経営者の重点の置き所は、この調査時点までの過去五～六年間とこれから将来に向っての五～六年間とに分けて見ると、①研究・開発②営業販売③設計・技術④生産現場の四項目についてであるが大きく変化している。（表1参照）

すなわち経営者の三六・六%の視線は、これからの最重点が今までの営業販売から研究・開発に移るとしていることを示している。それは激烈な企業間競争に生き残るための唯一の道だと考えているからである。

その反面においてはロボットや自動機械の導入による生産現場の省力や、広告情報造出技術の発達による人海戦術からの切換えが進む営業販売部門の在り方なども推測できるが、これは要するに、これからの技術者は腕の技術から頭脳の技術に変化すべきことを示しているものと解さざるを得ない。

そうした意味から学生の意識革命が必要であり、今年度からとられる前記一連の施策はこの観点からも極めて価値の高いものというべきであろう。

（経済企画庁調べ・数字で見る日本のあゆみ　三一五頁）

	研究開発	営業販売	設計技術	生産現場
過去の五～六年	一四・六	四三・三	九・三	九・九
これからの五～六年	三六・六	二四・六	一〇・二	五・七

企業の人員重点配置

56年度 業種別就職状況

57年3月2日現在

業種	機械工学科	電気工学科	建築学科	システム工学科	全体
建設業	1.5%	7.1%	62.1%	8.3%	17.7%
建築設計事務所			11.4%		2.5%
製造業	63.2%	48.1%	3.8%	45.2%	42.7%
卸小売業	8.8%	7.1%	3.8%	9.5%	7.3%
サービス業	8.3%	19.1%	1.5%	17.9%	11.5%
教育公務	4.7%	8.7%	4.5%	13.1%	7.1%
自営・その他	13.5%	9.8%	12.9%	6.0%	11.1%

訃報

本学にゆかりの三氏逝く

日上義雄氏

元機械工学科主任教授の日上義雄先生が去る一月三十一日に逝去されました。先生は、本学の設立時における功労者で、十九年三月に退職されるまで、学生の教育ひとすじに歩んでこられました。ここに謹んでご冥福をお祈り申しあげます。

齋藤甲馬氏

宮代町町長齋藤甲馬氏は、二月二十七日午後二時ごろ、入院先の杉戸町の東埼玉病院で、急性肺炎のため逝去。八十七歳。同氏は、三十一年に及び町政の指揮にあたられ、地方自治発展のため貢献された。とくに教育・文化面における功績が大きく、本学の宮代町への誘置も同氏の手腕によるところが大きい。三月十三日従五位を贈られ、勲四等旭日小綬章を授与された。

越谷達之助氏

日本工業大学校歌の作曲者でもある作曲家越谷（こしたに）達之助氏が、三月六日午後二時ごろ、肝不全のため、東京都世田谷区の駒沢病院で逝去されました。ご冥福をお祈り申しあげます。

日上先生を悼む

学長　三浦　靱郎

日上先生にはついこの間、一月十七日に催された後援会の新年会で、お目に掛かったばかりである。そのとき、腰かけておられた先生は、たまたまそばに立っていた私を見つめて、何か話しをしたそうにしておられた。

先生とは最近お知り合いになったばかりであるし、ふだんはなぜ腰を下ろして、少しの間でもお話を伺わなかったか、と思う。あのとき何を話そうとしておられたのか、それはもうあちらでお目に掛ったときに聞かせて頂くよりしかたがない。

49年卒業式の日の日上先生（左）

直截で、心の中からあの目を通って出てくるようなところがあった。私にはよく理解できた。

あの日は先生はいつになくたくさんお酒を飲まれたそうである。私はあちこちから話しかけられていたので、先生とは目礼を交しただけで、またおそばを離れてしまった。今になって、なぜもっとお話をしなかったのかと悔やまれる。力強くて、温かな手であった。先生のお話は

齋藤町長を悼む
みごとな教育行政を実践

理事長　窪田　宗英

昭和二十六年百間村長を皮切りに、通算八期、三十一年間にわたり町政のトップとして、町民の生活向上のために、独身ながらもその生涯を捧げられた齋藤甲馬町長の偉大さに、故人とならられたいま、あらためて敬意を表する次第です。

日本工業大学との関係も深く、本学園が大学を設置するということで、久喜周辺にその敷地を探していましたところ、齋藤町長は、当時、起っていた住宅団地の建設に反対されて、積極的に大学誘置の断を下されたのでした。常に前向きの姿勢で町政をリードしてこられた齋藤町長の面目躍如の一面でした。また、子供たちの夢を笠原小学校の建設で具現させ、県立宮代高等学校実現にまでこぎつけられた教育に対する情熱は、コミュニティセンター進修館の建設にも表現されています。ほかの行政についてもその功績は世人の知るところであります。ことしから日本工業大学に大学院が設置されました。齋藤町長がかつて持ち続けられた高邁な理想を、微力ながら私たちが受けついでいくことを誓いまして、ご冥福をお祈り申しあげます。

学園70周年記念で祝詞を述べられる齋藤甲馬町長

越谷先生をしのぶ
―岸辺目に見ゆ　泣けとごとくに―

総務部長　仲嶋　正之

校歌作曲者　越谷達之助先生が、三月六日逝去されました。

遠んで哀悼の誠を捧げます。

本学の校歌は、これまでもそうであったように、これからも永遠に限りない本学の躍進について、時に祈念し合い、時に喜び合いながら歌いつがれていくことでしょう。

ここで、私の知る生前の越谷先生をおしのびしたいと思います。

先生は、東京音楽学校（現芸大）を昭和六年ご卒業後、和歌山師範（現学芸大）教師を経て、昭和九年から終戦時まで演劇界に身を投じられました。演劇（東宝劇団）、映画（松竹）、詩の朗読（緑詩会）、詩劇（関口舞踊団）と若かった先生の活躍はすさまじいものがありました。

敗戦の時の空襲で渋谷の家を全焼され、やがて、独身を通した先生に残されたたった一人の最愛の人おはさんを亡くしてからは、先生は作詩、作曲、演奏会活動に没入されるようになりました。三浦環、奥田良三、長門美保さんらとのおつき合いが深まったのはその頃で、そして有名な歌曲集のかずかず、啄木によせて歌える、野薊、戦盲歌、日本哀歌、桐の花等々が流れるようにピアノから打ち出されていったのでした。

昭和四十五年の夏、私は先生に校歌の作曲を依頼しました。先生は、新しい大学のためなら作曲料はいらない、自分の心を込めてうたいあげよう、といわれました。私は注文をつけました。日本工業大学の日本は、ニホンでなくニッポンですよ。中程からのクレッセンドを経ての最後へのまとまりは、この校歌の絶唱といえましょう。

昭和四十五年、新校歌発表会のため奥田良三氏、リーダ・タールフェル合唱団と共に来学の際、体育館で聴いた校歌と「初恋」は、今でも耳の奥にあります。

昨年の暮、酒場で深く酔った私が、しようこともなしに先生にお電話した時が、私との最後となりました。その時先生はこういわれました。

「育　来年の春　四月ね　岩手で演奏会をやるんだ　啄木と賢治に会ってくるよ――」

いつでも　心美しく淋しがり屋のくせに　どこかでひとりもえていた先生

ご冥福を心からお祈りします。

後援会文庫

56年度購入分からばっすいして掲載

- 図説　日本文化の歴史12―12
- 人類の知的遺産
- 大日本近世資料
- ジョサイア・コンドル建築図面集II
- 五街道分間延絵図　中山分道間延絵図
- 中国書論大系
- 明治文化史
- 明治期鉄道史資料集
- 五街道分間延絵図　東海道分間延絵図
- 横濱繪集書
- 鎌倉遺文
- 神戸貿易新聞　1・2
- 街　明治・大正・昭和　関東編
- 死者の書
- 原色浮世絵大百科事典
- ミケランジェロ素描全集
- 大学図書館のシステム化
- 音楽大事典　1・2
- 心理学事典
- 日本文法事典
- 検知システム総覧
- サムエルソン経済学　上・下
- 洛中・洛外図
- 職人尽図
- 日本建築技術史
- 海軍艦艇史
- 工業計測便覧
- 治具実例集覧
- 日本書道大字典1・2
- 半導体工場環境清浄化総合技術資料集
- 日本の野生植物II・III
- 王羲之大字典
- 科学の社会的機能
- 学校施設総覧
- 安藤昌益全集第1巻
- 主題書誌索引
- 国文学研究書目解題
- 出版年鑑　一九五一～一九八〇年版
- 官庁刊行物総合目録　1巻～8巻
- 新収洋書総合目録　一九五四～七一、七五～七六年度
- 定本庄司浅水著作集
- 五万分の一　白地図（全地域）
- 毎日ニュース事典　一九七三～一九七九年版
- 世界紀行文学全集　全21巻
- 西蔵絵巻集成
- 学術雑誌総合目録　人文・社会科学欧文編
- 上林暁全集　18・19
- 加賀藩史料藩末編（上・下巻）
- 加賀藩史料
- 明治漁業開拓史
- 横須賀海軍工廠史
- UP選書
- 朝永振一郎著作集